様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月４日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５３０４６５
研究課題名（和文）　ヒューマンサービスを共通基盤とする援助専門職等の現任者訓練に関わる研究
研究課題名（英文）　Study on Human Service Practitioner Training

研究代表者
吉村　夕里（YOSHIMURA YURI）
京都文教大学・臨床心理学部・准教授
研究者番号：５０３８８２１１

研究成果の概要：
研究目的は、「ヒューマンサービスに従事する援助専門職を対象とした実用性、汎用性の高いティーチィング・メソッドの開発」「現任者教育演習に活用できる教材の開発」である。研究成果は、①援助専門職へのインタビュー調査やアンケート調査に基づき、現在の援助専門職の学習モデルとして、制度施策と行政事務手続きの遂行を重視する[官製モデル]と、職能団体や教育養成機関などにおいて取組まれている教育的スーパービジョンを典型とする[職能成熟モデル]を抽出、②状況的学習に重点を当てることを意図したライフモデルに基づく領域分析や時系列分析表、場面エコマップとプロセスレコードなどを取り入れた教育演習方法の開発と試行、③イギリスにおける User-Involvement の教育の日本への紹介、④身体障害や精神障害当事者が参画した教材の開発と利用者参画の教育演習の実施などである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,400,000	0	1,400,000
２００７年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	660,000	4,260,000

研究分野：社会福祉
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学（３８０２）
キーワード：　ヒューマンサービス、　援助専門職、　共通基盤、　現任者訓練、利用者参画、ナレッジデザイン、　学習環境　、　利用者―専門職関係

１．研究開始当初の背景

ヒューマンサービスの共通基盤に関わる研究としては、ソーシャルワークにおいては1960 年代から統合化論が現れ、対人援助の共通基盤としての「価値」「知識」「方法」「技術」を追求する研究が主として北米において行われてきた（秋山,1999）。これらの動向は1990 年代にわが国にも精力的に紹介され、以後、生活モデル、エンパワメントとストレングスの視点、ナラティブなど、様々な実践モ

デルが導入されて現代に至っている。また、障害者ケアマネジメント、グランドデザインなど、新しい政策的スローガンにおいても、生活モデルやノーマライゼーション理念が謳われ、それらを基盤にした実践における多職種協働アプローチが求められている。さらに社会福祉基礎構造改革以降の流れに沿った実践においては、理念としては施設福祉からノーマライゼーションへ、アプローチとしては医学モデルから生活モデルへ、対象としてはマイノリティモデルからマジョリティモデルへの進化が必要とされてきた。そして、以上の実践理念の変換に対応できる人材の養成を目指して、また、様々な資格制度の整備に基づいた職種の細分化を背景として、教育養成課程の編成が近年は急激に進行している（社会福祉・社会保障研究連絡委員会報告,2003)。しかし、援助専門職教育においては、資格取得それ自体を目的化した養成課程が中心になり、ヒューマンサービスの実践現場で利用者から求められている専門性と、教育養成課程で習得が目指されている専門性が真に適合しているか否かについての点検は希薄になりがちである。その結果、現場に進出した援助専門職たちは、利用者から求められている専門性と、援助専門職養成課程で習得した技術や方法とのギャップに苦しんだり、具体的な技術や方法の裏づけのないスローガン的な実践に空しさを感じたりする、という理論と実践の乖離も指摘されてきた（太田,1999)。この背景には、様々な実践モデルは実用的なものとしてではなく、メタモデルとして習得されており、細分化した資格習得のための教育養成課程では現代のヒューマンサービスの現場で必要とされている多職種協働や利用者参加型の実践に対応できないという問題が存在する。加えて、援助専門職の実践のオルタナティブとして発展してきた自立生活運動やピアカウンセリングなどの実践、地域住民を巻き込んだ地域リハビリテーションやトータルリハビリテーションの実践理念等の浸透により、実践現場における援助専門職と市民、各職種の実践の差異化は曖昧になり、実際にはボーダーレスな状態となっている（吉村,2005)。このような現実に対応できるヒューマンサービスを共通基盤とする援助専門職の教育プログラムや卒後教育プログラムの体系化は実践現場の喫緊の課題となっている。

文献：①太田義弘・秋山薊二（編）(1999)．ジェネラル・ソーシャルワーク．光生館．②日本学術会議．第 18 期社会福祉・社会保障研究連絡委員会．(2003)．ソーシャルワークが展開できる社会システムづくりへの提案

２．研究の目的

研究目的は、「ヒューマンサービスに従事する援助専門職を対象とした実用性、汎用性の高いティーチィング・メソッドを開発すること」「現任者教育演習に活用できる教材を開発すること」である。研究全体の構想は、「ヒューマンサービスを共通基盤とする援助専門職が活用できる技術や方法についての基礎的教育法の体系化」「その習得を可能とするティーチィング・メソッドと教材の開発」であり、予想される結果と意義は、「実践現場の援助専門職のエンパワーへの貢献」である。

３．研究の方法

メタレベルからの技術や方法の同定ではなく、援助専門職の現任者や利用者自身が必要と感じている具体的な技術や方法を、マルチメディアを活用したデータ収集やインタビュー調査などから同定すること、現場の援助専門職の現実的なニーズに基づいたボトムアップ方式の作業遂行を行うことに重点をおいた。研究方法の具体的な特色は以下のとおりである。

第一に実践現場で活躍する援助専門職との応答性を尊重したことがあげられる。第二に分析手法の着眼点の斬新さがあげられる。援助専門職との応答性については、研究代表者の吉村や研究分担者の所の豊富な臨床経験や現場とのつながりを生かして、現任者や利用者自身の声を反映したメソッドと教材の開発をめざしたこと、その基盤を利用者や援助専門職自身へのインタビュー調査や、実際の相談援助場面や教育演習での援助専門職自身のロールプレイ場面の分析等におくことにより可能とした。分析の焦点は、利用者―援助専門職双方の身体表出、言語表出、ストーリング、場面構造などである。分析手法の独創性としては、利用者―援助専門職双方の視点や、双方が構成する場面の構造や力動を視野に入れた分析を実施した点にある。

４．研究成果

平成 18 年から 19 年度にかけて、援助専門職の現任者研修へのニーズや、その問題点を明確化する目的で、教育演習に参加した援助専門職 210 名に対するアンケート調査や、教育演習体験に関するフォーカスグループインタビュー、研究代表者の吉村と研究分担者の所及び研究協力者の浅野が京都国際社会福祉センターなどで実施したインタープロフェッショナル教育の参加者 29 名に対する効果判定と演習場面の分析を行った。また、研究代表者の吉村は利用者と援助専門職間の問題に焦点をあてて、利用者と援助専門職へのフォーカスグループインタビュー、グループアプローチ場面への参与観察に基づく

相互作用分析やビデオ分析などを、高齢者施設や精神科デイケア施設3か所で3年間継続して行った。その結果、援助専門職の学習モデルとして、制度施策と行政事務手続きの遂行を重視する[官製モデル]と、職能団体や教育養成機関などにおいて取組まれている教育的スーパービジョンを典型とする[職能成熟モデル]を抽出した。また、どのモデルにおいても[具体的][実践的][体験的]な要素が重視されていると同時に、参加者がもつ相談援助の現場の[状況に密着]した事例や課題に焦点があてられているか／否かが、参加者の学習への動因を左右することが確認された。さらに、援助専門職が感じる困難さの原因については利用者のパーソナリティに、解決方法については援助専門職自身のコミュニケーション能力の問題に、それぞれ帰属させる傾向が援助専門職に存在することも確認された。以上の調査結果から、援助専門職の教育演習では、[状況的学習モデル]の立場から教育演習を実施する重要性が申請者たちに認識された。そこで、利用者と援助専門職間に日常的に生じている、軋轢や葛藤場面の現実の特徴を明確化するために、利用者や援助専門職へのフォーカスグループインタビュー、介護ケアや臨床的アプローチなど、様々な援助場面や臨床場面に対する参与観察やビデオ撮影を行った。以上の分析にあたっては、相互作用分析や会話分析、グラウンデッド・セオリーなどの手法を用いて、場面構造や場面力動の明確化を試みた。その結果、ライフモデルに基づく領域分析や時系列分析表、場面エコマップとプロセスレコードなどを取り入れた新たな教育演習方法を開発して、現任者訓練に活用した。また、平成19年度後半から 20 年度にはそれまでの研究成果を踏まえて、定例研究会のメンバーに障害福祉サービス利用者を加えた。以下に、年度ごとの経緯を記述する。

（1）平成18年度

①援助専門職に対する現任者訓練等の実施を通じて既に蓄積してきたデータの分析と国内外の教材の収集等を行った。また、研修機関の企画担当者や、社会福祉士や精神保健福祉士、介護職などの援助専門職の現任者たちが参加する研究会を実施して、データ分析体制の整備を行った。

②援助専門職 29 名に実施したインタープロフェッショナル教育に対する1年間の関与観察や、援助専門職210名に対するインタビュー調査の実施をとおして、現在の教育演習モデルの問題点の分析を行った。

③精神科デイケアや認知症グループホームでの利用者／専門職間の相互作用分析を、継続的な関与観察に基づいて行い、利用者や専門職間の相互作用と臨床場面の環境デザインとの関連を検討した。

成果としては、援助専門職の教育研修の問題点として、その学習モデルが[官製モデル][職能成熟モデル]に偏っていること、環境アセスメントが軽視されていることなどを指摘すると同時に、以上を吟味する批判的枠組みとしての状況的学習モデルの重要性を明確化したことがあげられる。第二に、「統合失調症の人を対象とした集団療法の場面」「認知症のグループホームケアの実践場面」に対する相互作用分析をとおして、臨床場面における身体やモノの布置のデザインが専門職の間の統制力に影響を与えていることを、具体的な事例をとおして明確化したことがあげられる。以上の成果は、学会発表や論文をとおして公表した。

（2）平成19年度

①平成18年度に引き続いて、援助専門職の研修に対するニーズや臨床場面での利用者との葛藤や軋轢を明確化することを目的として、援助専門職と利用者双方（約30名）に対するフォーカスグループインタビューを実施した。

②利用者／援助者間の葛藤や軋轢を明確化することを目的として、マルチメディアを使用した臨床場面でのデータ収集を行い、スクリプト分析や相互作用分析を行った。また、資料収集から分析評価まで障害福祉サービスの利用者の参加を得た。

③相互交渉場面の分析や場面エコマップなどを取り入れた新たな教育演習方法を開発して、認知症ケア現場における現任者教育演習で継続的に試行した。

結果の分析にあたっては月1回の定例研究会を実施すると同時に、研究会のメンバーに障害福祉サービス利用者を加えた。また、User-Involvement の教育の実態調査、視察を目的として研究分担者の所をイギリスに派遣した。さらに、平成20年2月24日に「サービス利用者／サービス提供者がともに参与できるナレッジデザインの探求：対人援助の学習モデル」と題した拡大研修会を開催して、教育演習の関係者40名を集め、援助専門職の学習モデルの検討とユーザー参加型の教育演習の在り方に対する検討や問題提起を行った。以上の成果の一部は、援助専門職の学習モデルの問題や、利用者／専門職間の組織力学や専門職の統制力の問題として、学会や大学紀要、雑誌などに発表した。

（3）平成20年度

19年度に引き続いて、User-Involvement の教育観点を重視した研究と研究体制の確立」「援助専門職の学習環境デザインの点検」「援助専門職教育における福祉・医療サービス利用者の役割と権利の検討」をめざした以

下の作業を遂行した。
　具体的な中身としては、①福祉・医療サービスの利用者と提供者、学生、住民など、インターエージェンシー、インタープロフェッショナルなメンバー41 名の関与によるプロジェクト方式の研究体制の確立と例会の実施。②サービス利用者と提供者間の葛藤場面に関わるスクリプトの収集と収集したスクリプトを対象とした会話分析やスクリプト分析の実施。③福祉・医療サービスの利用者が参画した映像教材の開発（精神医療ユーザーや車イス使用者が参画)。④映像教材の開発過程におけるプロジェクトメンバー間の相互作用分析。⑤利用者が参画した映像教材を使用して、利用者自身が参加する援助専門職養成教育を実施。⑥イギリスにおける User-Involvement の教育の実態調査と視察。⑦関係者 50 名を招いた研修会「援助専門職の学習環境のデザイン：社会福祉教育への利用者の参画とコミュニティ形成」の実施などである。また、以上の成果は学会発表や科研費報告書「ヒューマンサービスを共通基盤とする援助専門職等の現任者訓練に関わる研究」の公刊を通して公表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１６件）
1.吉村夕里.（監修,2009）.平成 18 年度～20 年度科学研究費補助（基盤研究 C）報告書「ヒューマンサービスを共通基盤とする援助専門職等の現任者訓練に関わる研究」(108p)
2.吉村夕里.(2009).当事者が参画する社会福祉専門教育（その 1）～精神医療ユーザーと協働する視覚教材づくり～.京都文教大学 臨床心理学部研究報告,第 1 集,掲載確定. 査読.
3.吉村夕里.(2008).精神障害をめぐる組織力学:全国精神障害者家族会連合会を事例として.現代思想 特集=患者学(pp.138-155),36,3,青土社.
4.吉村夕里.(2008).臨床場面における身体やモノの布置:統合失調症の人へのグループアプローチから.京都文教大学人間学部研究報告,第 10 集,pp.1-17.査読.
5.上田宣子・藤澤枝美子・青木信雄・細馬宏道・吉村夕里・吉村雅樹.(2008).「飲まずに噛んだ?」「噛まずに飲んだ!」－グループホームにおける相互行為.聖泉論叢,15,聖泉大学短期大学部,pp.303-324.
6.吉村夕里.(2008).専門職の統制力：精神障害をめぐるミクロとマクロのツール.博士論文(甲第 528 号).査読.
7.吉村夕里.(2007).精神医療論争～電気ショックをめぐる攻防～.コア・エシックス,Vol.3,立命館大学大学院先端総合学術研究科,pp.375-390.査読.
8.吉村夕里.(2007).電気ショックの歴史と研究動向.Birth,Vol.1,立命館大学大学院先端総合学術研究科,pp.1-11.
9.吉村夕里.(2006).精神科デイケアにおける家族療法.京都文教大学人間学部研究報告,第 8 集,pp.29-43.査読.
10.吉村夕里.(2006).精神障害をもつ人に対するアセスメントツールの導入:臨床ソーシャルワークの新たな問題.質的心理学研究,5,pp.121-143.査読.
11. 所めぐみ. (2008).海外社会保障事情.『当事者』が参画する英国の社会福祉専門職養成.総合社会福祉研究所, 6 月号, pp.68-69.
12.所めぐみ.(2008).第 5 章 地域福祉とソーシャルキャピタル.井岡勉(監修),住民主体の地域福祉論(pp.55-68).法律文化社.
13.所めぐみ.(2008).地域福祉と地域を基盤とした生涯学習の展開：ソーシャル・キャピタル論を手がかりとして.佛教大学社会福祉学部論集,4,pp.109-127.
14.所めぐみ.(2007).ソーシャル・キャピタル概念と地域福祉についての一考察.龍谷大学社会学部紀要,30,pp.11-20.
15.所めぐみ.(2006).英国におけるソーシャルワーカー養成教育の改革の経緯と課題－労働力の問題を中心に.龍谷大学社会学部紀要,28,pp.43-48.
16.浅野貴博.(2008).ソーシャルワーカーのアイデンティティ形成に向けた継続教育・訓練のあり方:～“わかる”から“できる”そして“かわる”へ～,国際社会福祉情報,31,pp.41-54

〔学会発表〕（計１３件）
１．所めぐみ・吉村夕里.(2008).日本社会福祉教育学会第 4 回大会(口頭発表). 2008 年 11 月 8 日.
2. 吉村夕里.「当事者が参画する社会福祉専門教育(その１)～精神医療ユーザーと協働する映像教材づくり～」日本福祉文化学会第 19 回全国大会(口頭発表).2008 年 10 月 19 日.
3. 木村善男・吉村夕里.「当事者が参画する社会福祉専門教育(その 2)～車イス使用者の日常のなかに存在するバリアに関する映像教材づくり～　日本福祉文化学会第 19 回全国大会(口頭発表).2008 年 10 月 19 日.
4. 河合純子・桑原陽・太田澄子・ 吉村夕里・青木信雄.「認知症高齢者の強みの支援と QOL 維持～グループホームでの看取りを経験して～」第 9 回日本認知症ケア学会(口頭発

表).2008 年 9 月 27 日.
5. 玉城栄之功・太田澄子・桑原陽・吉村夕里・青木信雄.「認知症高齢者困難場面解決の為の検討方法」第 9 回日本認知症ケア学会 ポスターセッション.2008 年 9 月 27 日.
6. 桑原陽・田中広美・玉城栄之功・青木信雄・吉村夕里.「強みを日常生活支援に活かす為の課題」第 8 回日本認知症ケア学会大会ポスターセッション(共同研究).2007 年 10 月 13 日.
7. 吉村夕里・所めぐみ.「サービス利用者／サービス提供者がともに参与できるナレッジデザインの探究～ユーザーが参画する教育モデルの確立をめざして～」.日本社会福祉学会第 56 回全国大会(口頭発表).2008 年 10 月 12 日.
8. 所めぐみ.「専門職養成における『当事者』・地域と養成機関との連携についての研究・英国のソーシャルワーカー養成プログラムにおける『当事者』・地域の参加（その 1).日本地域福祉学会第 22 回大会（口頭発表).2008 年 6 月 15 日.
9. 玉城栄之功・太田澄子・桑原陽・吉村夕里・青木信雄.「主観的満足度評価を活用した生活環境の提案」第 8 回日本認知症ケア学会大会(口頭発表).2007 年 10 月 12 日.
10. 吉村夕里・所めぐみ・浅野貴博.「援助専門職の現任者訓練に係る課題①－受講生のニーズと教育演習プログラムの内容は合致しているのか－」日本社会福祉学会第 55 回全国大会(口頭発表).2007 年 9 月 22 日.
11. 浅野貴博・吉村夕里・所めぐみ.「援助専門職の現任者訓練に係る課題②－受講生のニーズと教育演習プログラムの内容は合致しているのか－」日本社会福祉学会第 55 回全国大会(口頭発表).2007 年 9 月 22 日.
12. 玉城栄之功・青木信雄・吉村夕里他.「エコマップを活用した強みアセスメントの試み」 第 7 回日本認知症ケア学会大会(口頭発表). 2006 年 10 月 1 日.
13. 吉村夕里.「相互交渉はいかに構成されるのか：統合失調症の人を対象とした面接場面の分析から」第 42 回日本心身医学会近畿地方会(口頭発表).2006 年 7 月 22 日.

〔図書〕（計１件）
1. 吉村夕里.(2009 年 8 月発行予定).臨床場面のポリティクス：精神障害をめぐるミクロとマクロのツール（仮題）.生活書院.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
吉村　夕里（YOSHIMURA YURI）
京都文教大学・臨床心理学部・准教授
研究者番号：５０３８８２１１

(2)研究分担者
所　めぐみ（TOKORO MEGUMI）
佛教大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：００４１１２８１

(3)研究協力者
浅野　貴博（ASANO TAKAHIRO）
京都国際社会福祉センター・同志社大学社会福祉学修士